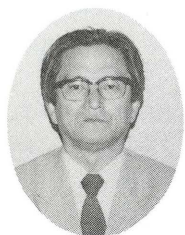


西南学院大学・ 図書館報

読んでほしいこの1冊ノ 大橋 浩・工藤博子・
森本旗江・熊本利幸・白土智子・大崎正彦 2~4

図書館業務電算化の経緯と今後の
推進計画について 5
古都コンスタンツの総合大学図書館 山田 洋 6
大学図書館発足のころの思い出 … 山下和夫 7
お知らせ・報告 8



「二冊の本」の最後の頁

図書館長 長 洋 一

昭和22年、私のところに近所の先輩一伊藤知巳氏が、『哲学概論』（紀平正美著）と『史的唯物論』の二冊の本を持ってやって来た。

この『哲学概論』の最後の頁には、先輩の父親一伊藤栄治氏の手で、三十才を過ぎて涙を流すこともなくなっていたが、この本を読んで久し振りに涙が出た、と書いてあった。また『史的唯物論』には、先輩の若々しい字で「真理よ、最後の勝利は御身のものなり」と記されていた。先輩の父親は私もいろいろお世話になった方だが、山形県出身の医師で、同郷の写真家土門拳氏とは、「いとこ」の間柄であった。また先輩は、父親の教育方針で旧制のわが西南学院中学に学び、後に早稲田大学文学部に進み、卒業後は土門拳氏と一緒に仕事をし、写真評論家となる。現在、山形県酒田市に、『ヒロシマ』『筑豊の子どもたち』『古寺巡礼』などの写真集で人々をひきつけた土門拳氏の、仕事の全貌を伝える写真博物館があるが、これは先輩が建設の責任者となり、渾身の力をふりしぼって造った、世界唯一の写真博物館である。しかし先輩は、これを完成させた後、急に世を去った。

この先輩が、昭和22年、二冊の本を持ってきてくれた時は、早稲田大学の自治会役員をし、かつ、敗戦後の日本民主化の一翼を担う大学自治会の全国組織一全学連一を組織するのに活躍していた時であった。その合い間に、当時福岡で、病に臥せていた私のところに本をもって来てくれたのである。その時の『哲学概論』は、

かつて先輩の父親が読み、先輩が読み、ついで私に渡されたのである。私はこれを読んだが、先輩の父親が涙したということを理解することはできなかった。むしろ私はこの本よりも、『史的唯物論』の方が、そこに記された先輩の言葉と共に理解できた。

その後しばらくして、私は大学に学ぶことになり、松村武雄著『日本神話の研究』第二巻を読んだ時、該博な知識によって、日本神話の特色が説きあかされていくのに非常に感動した。その時、私は先輩の父親が本を読み涙したということが、何かしら判るような気がした。論理によって説きあかされていく真実—真理には感動が伴うものであった。それは、その人の立場で異なることもあるだろうが、本の中にはそのような感動をよびさます力がある。

私は講義で神話について話すことがあるが、それは『日本神話の研究』を読んだ時の感動に根ざしている。本を読む多くの人の中には感動し涙するという経験をもつ人もあるだろう。その感動は、おそらく何らかの形で人々に伝えられているにちがいない。

今からの情報化社会の中で、本学に限らず大学図書館のあり方が問題となるが、椅子に腰をおろして読み続ける本の中から、感動の湧出がなくなることはない。図書館は、今後も、よい本を沢山そろえ、読書・研究の条件を完備して、豊かな世界への土台となっていくべきであろう。

（ちょう よういち：文学部教授）

★★★読書の秋★★★

読んでほしいこの1冊！

『レトリックと人生』

渡部 昇 一 他訳

文学部助教授 大 橋 浩

「上機嫌」は、I'm feeling up. I'm in high spirits. といい、「落ち込んでいる」は、I'm really down. I'm depressed. という。

ことばは私たちが現実世界をどの様に捉えているかを映し出す。そして、その認識をことばで表す際の中立ちとなり、また逆に、認識のしかた自体に大きな粗組みを与えるのが隠喩—メタファーである。隠喩や換喩などのレトリックは、ともすれば相手を説得するための有効な手段にすぎないと考えられがちであるが、実は、人間の認識と言語に重要な関わりを持っているのだという主張が、豊富な英語の例—そして本訳書ではその日本語訳—とともに述べられていく。

例えば、「議論」の様にやや抽象的な概念をより明確に理解するためには、より具体的な、「戦争」という概念をメタファーとして用いていることが、次のような例で示される。

He attacked every weak point in my argument.

I've never won an argument with him.

If you use that strategy, he will wipe you out.

更に面白いのは、この種のメタファーは、単にある1つの類似点を持つのではなく、構造的な類似性を持つという指摘。いわく、議論にも戦争にも、守るべき意見(陣地)と攻めるべき意見の衝突があり、論戦の開始・攻撃・防御・退却・反撃・休戦等の過程を経て勝利・敗北という結末に到るという具合に。

何気なく使っていることばを考え直してみる絶好の機会を与えてくれる本である。

[1986年 大修館 2,300円]
おおはし ひろし：英文法]

『自 省 録』

マルクス・アウレリウス著

文学部助教授 工 藤 博 子

「人類の進歩」という言葉をよく耳にします。しかし、私は、物質文明以外の部分での進歩は

全く無いと考えています。人間そのものが変らない結果、歴史は繰り返され、歴史の教訓は学ばれないのですが、にもかかわらず、人間に進歩が無いことは、悲しむべきことではなく、むしろ素晴らしいことであると思われます。なぜなら、幾千年も前の人間の思想や行動が、時を超えて永遠に価値をもつことが、この事を前提としてのみ可能となるからです。

この事実に気付かせてくれたのが、ローマ帝国の五賢帝の一人、マルクス・アウレリウス帝の残した『自省録』(岩波文庫)でした。

アウレリウス帝は、侵入してくるゲルマン人との戦いの中で、紀元180年、ウィンドボナの陣中に58年の生涯を終えるのですが、『自省録』は、皇帝としての責務を誠実に果しながら、折にふれ自身の考察や感慨を書きとめた覚え書きです。人に見せることを全く意図していないので、何の気取りも衒いもなく、極めて簡潔な文章で書きとめられています。

皇帝の位を継ぐべく生まれてきた彼が、ストア哲学を拠り所として、実に厳しく自分自身を律していく過程と、その真摯で崇高な魂は、読む者を鞭打ち、励まさずにはおきません。

歴史の大きな流れの中のほんの一瞬でしかない人間の生命ではありますが、生き方次第では、永遠の命を手に入れることが可能であること、有限であると同時に無限であることを、この一冊は教えてくれます。

[1982年 岩波書店 400円]
くどう ひろこ：国語学]

『月 山』 森 敦 著

庶務課 森 本 旗 江

森敦氏は今年7月末逝去された。放散のみを衒い、凝縮への努力のなかなか窺えない現在の文学界において、もはや時流を超えたところで紡がれる氏の文学は、ある意味ではもっとも古典的であった。その作品は常に、唯一不思議な明るさを帯びていた。

本書では、月山の麓にある朽ちた注連寺での山ごもりの体験がゆるやかに語られる。「論理

読んでほしいこの1冊!

★★★読書の秋★★★

の背後にむしろ実体験があるようなものを書いておきたかった」という永年の念いを満すものであった。「小説(実体験)の背後に論理ではなく」と聴いてはじめてこの愚昧な者にも『月山』の深意が心にしみてきた。「死こそがまさにあるべき唯一のもの」(傍点著者)であり「もともと本然の時間^{ほんね}があって、僕の死、君の死も吸収されるのだ」という生命の「無限観」が、壮厳な冬場の山ふところに悠悠とうたいあげられる。死によって吸収されてゆくこの世の情念が吹き(吹雪)にのって舞いあがる。

注連寺のきびしい寒さを凌ぐために和紙の祈禱帳で蚊帳を張り、その中に籠る場面がひととき鮮やかだ。裸電球ひとつが照らしたその中を繭の中のようにと語る主人公に、寺のじさまは呟く。「おらほうだば、カイコは天の虫いうのて。繭の中で天の夢を見とるといふもんだ」吟遊詩人はいま繭の中、天上に遊ぶ。

[1974年 河出書房新社 980円]
[もりもと はたえ]

『肉体の悪魔』

レイモン・ラディゲ著 新庄嘉章訳

商学科3年 熊本利幸

この本は去年の夏、バイト先の先輩に勧められて読んだのですが、とてもいい本だったのでここで紹介したいと思います。

この本の作者、レイモン・ラディゲは1903年に生まれ、1923年には亡くなっています。わずか20年の人生だったわけです。その間に彼は、2編の小説を残していますが、その1つがこの『肉体の悪魔』なのです。

この作品は、ラディゲが16歳から18歳の間に書かれたとされているもので、物語は第1次大戦中のフランスを舞台に主人公の少年と人妻マルトとの恋愛、年上の女性との恋愛における男性のエゴイズム、そのエゴイズムの犠牲となる女性の死を描いたものだが、とても20歳にもなっていない少年が書いたとは思えないほど、恋愛における心理を見事に描いている。

ラディゲのすごいところは、この作品をただ

のロマンチックな恋愛小説としてではなく、あくまでも正直に、飾ることなく自分の心を冷静で、客観的な目で分析し、人間の情熱を直視し、それを不自然に高貴なものに見せようなどといった小細工をせずに描いているところだ。

いろいろ書いてきたが、とにかく一度、この作品を読んで、天才児、レイモン・ラディゲに触れてほしいと思います。また、機会があれば『ドルジェル伯の舞踏会』の方も合わせて読まれるといいと思います。

[1967年 新潮社 280円]
[くまもと としゆき]

『メメント・モリ』藤原新也著

国際文化学科3年 白土智子

「私はこの本に出会うべくして出会ったのではないか」と、おこがましくもそう考えた時に、何だかその運命的なものに、嬉しいようなくすぐったような不思議な気持ちになる。

鮮やかで、インパクトの強い写真、その上に乗った、ドキッとするような言葉。

メメント・モリ——死を想え——タイトルさえも少し不気味で、心引かれる、小説では全くない。ただの写真集とも言えない。詩集とも言えない不思議な雰囲気をもつ本である。著者の第一声は、「ちょっとそこのあんた、顔^{かお}がないですよ」。目の前でそう言われるともしかして私は、鏡を捜すかもしれない。あるいは、手でひとつひとつその造作を確かめるかもしれない。

情報が多すぎる「今」の中で、私達は鈍くなっている。その多い情報に惑わされることによって、何が正しくて、何がそうでないのかを判断する基準を持ちにくくなっているような気がする。またそれによって色々なことを経験している。旅行、盗み、知人の死、恋愛、そして殺人までも。自分が実際に手元で行なう体験が薄くなってゆく。間違えば「生」そのものが軽く感じられてしまうような。生の重さ、死の重さをあまり感じずに生きてしまうかもしれない。

自分自身が生きるバランス感覚を養うために。

「つらくても、等身大^{とうしんだい}の実物^{じつぶつ}を見つづけなけ

★★★読書の秋★★★

読んでほしいこの1冊！

れば、ニンゲン、滅びます。」

[1983年 情報センター出版局 980円]
[しらつち ともこ]

『私の人間学(上・下)』

池田大作 著

経営学科3年 大崎正彦

奇想天外の冒険物語に心ときめかし、波乱万丈な革命小説に胸躍らせて、読みふけりながら、ふと我にかえって、自身の生活の平凡さに意気消沈する。それでも心の中では新たな発見とささやかな感動をいつも求めている。そしてときとして、日常の生活の一場面から見いだす、いい知れぬ感動とよろこび、素朴で平凡な生活の中からの発見。そして思い出される。奇想天外の冒険物語や波乱万丈の革命小説にしても素朴で平凡な思いの中から創りあげられているのではないかと。そしてまた現実の歴史も人々の素

朴な思いによって刻まれてきているのではないかと。

この本は、歴史上の人物やエピソードまたは著名な文学等に題材を求めて描かれている。

そして、全ての題材を通してあらわされているのは、人々の素朴な思いと、そしてその力の凄まじさではなからうかと思われる。創造の源泉をたどり、情熱の力を見出したクフ王のピラミッドの話から、アレクサンドロス大王のペルシャ遠征の際の思いを描いた話、フランス革命を回転させた平凡な一婦人であるルグロ婦人の勇気と行動の話等のさまざまな題材によって描かれている。

灯火親しむべきころに最適なホットな一冊である。一冊といいつつこの本は上下二分冊になっている。

[1988年 読売新聞社 各1,200円]
[おおさき まさひこ]

図書館業務電算化の経緯と

今後の推進計画について

図書館システム運用係

今日の高度情報化の中で、教育・研究に必要とされる各種の学術情報は、年を追ってその量を増し、また学際的研究の拡がりとともに質の変化と高度化が進み、メディアの多様化に伴った利用者のニーズも広範囲におよんでいる。

こうした現状において、大学図書館は利用者の要求に応じて、いかに的確迅速な対応をしていけばよいのか極めて厳しい環境に立たされている。

自館のみにて、あらゆる情報の中からこれを選択収集し、利用に供するということにはおのずから限界があり、そのためには、他大学との相互利用、相互協力のもとに、大学間ネットワ

ークを形成し、また、学術情報センターとの接続によるデータベースの構築、更には、情報検索サービスの向上を計るなど、今後の大学図書館業務を質的に転換させ、合理的な処理体制を確立していくには電算化は最早、必須の条件といえよう。

このようなことから、本学では、1988年から既に進められている第6次財政計画の中で、教育・研究の質的向上をめざす重要施策の一つとして、図書館業務の電算化が策定され実施に移された。

導入機種選定のための委員会が設置され、同時にトータルシステムをめざし全館体制で臨む

べく、館内にプロジェクトチームを編成し検討が行われた。

提案された数社の機種の中から、HITAC M 630/10が選定され、また図書館システムとして LOOKS/U (Library Information Management Kanji System for University) の導入が決定した。

1989年2月、機器搬入後、調整を兼ねテストランを繰り返し、ようやく今年4月からその手初めとして、図書サブシステムを稼働させ、図書の発注、受入れなど整理業務を中心にデータ入力を開始した。

更に9月からは、閲覧サブシステムのうち、図書の貸出、返却業務をスタートさせ、図書館業務の効率化を計るとともに、利用者サービスの向上に努めている。

一方システムの稼働に並行して、データベース構築のためには、新規登録の資料や図書はもとより、所蔵図書53万冊の遡及入力が必要であり、当面、和書については1977年以降、洋書は1965年以降の出版物約25万冊を対象に、書誌の入力を開始しており、今年4月から現在まで

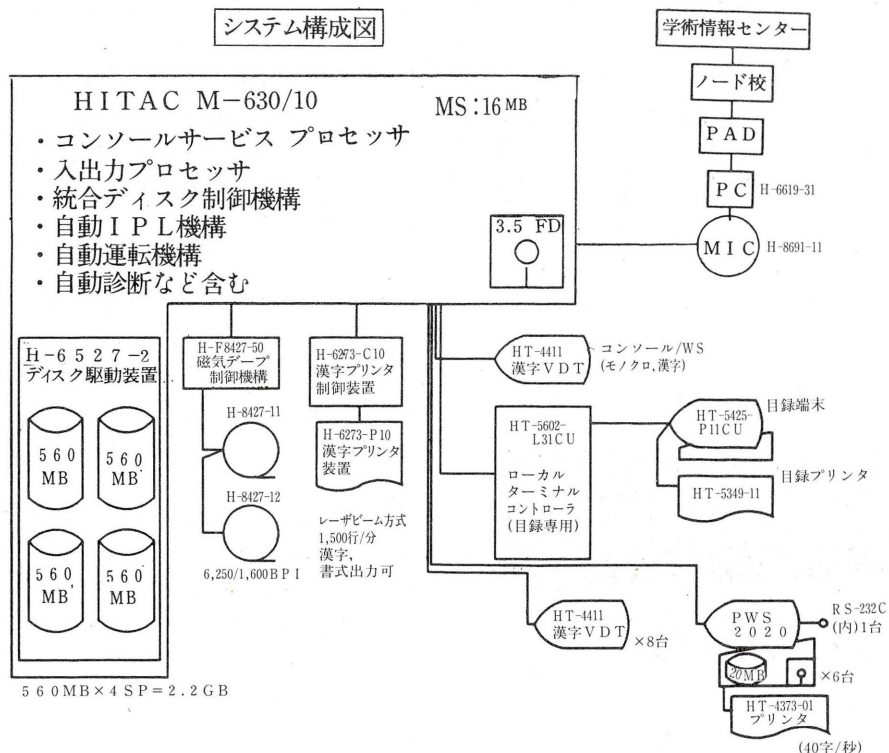
の入力件数は4万5千冊に達している。

今後の推進計画としては、明年1月を目処に学術情報センターとの接続を実現させ、書誌のアップロード、ダウンロードによる高品位の書誌データベース構築に向けスタートする予定である。

また明年4月には、予算管理、雑誌管理システムを同時に稼働すべく、目下開発を急いでいるところである。

このように一連の図書館業務がトータルシステムとして全面稼働を開始した時点では、館内に検索用開放端末機を設置し、また学内LAN (Local Area Network) により、図書館外から書誌の検索も容易であり、必要とする各種の情報を迅速に入手することが可能となる。

理想的な図書館、利用者に歓迎される運営を目ざして、目下図書館員は精力的に努力している。試行的な作業もあり、場合によっては皆さんにご迷惑をおかけすることもあるかもしれないが、しばらくの間、ご理解とご協力を願う次第である。

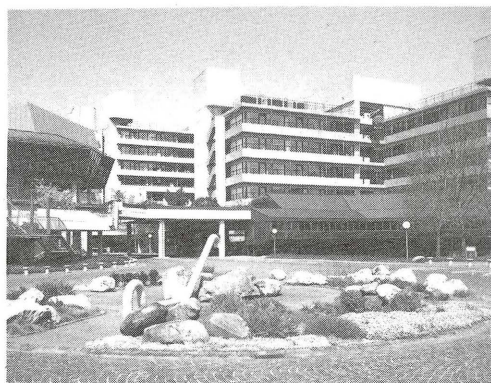


コンスタンツ (Konstanz) 市は、人口約7万。観光ルートからはずれているため、日本人にはなじみが薄い。ボーデン湖とスイス国境に囲まれた西ドイツ有数の保養地である。ローマ皇帝に由来する名称からも明らかとなり、街の歴史は古い。コンスタンツ宗教会議 (1414年) でも知られるカトリック都市でその伝統を今に伝える街のシンボルである大聖堂は、今年、献堂900年を祝っている。

これに対して、大学の歴史は新しく、1966年秋の開学から20数年を経ているにすぎない。数百年の歴史を誇る大学が多いヨーロッパに

おいては (ハイデルベルク大学は約600年)、まさに今出来の新設大学といえる。建物も、街中に古い石造りの建物が散在するというヨーロッパの大学街のパターンとは異なり、湖を見下ろす郊外の丘に近代建築が立ち並び、原色の目立つ外観は、重厚とは正反対の印象を与える。法学部のほか、社会科学部 (心理学・社会学・政治行政学・教育学・体育学)、人文学部 (文学・歴史学・哲学・語学)、経済統計学部、数学部、物理学部、生物学部、化学部を有する州立の総合大学である。

新大学の学際研究への指向を反映して、図書館も総合図書館システムを採用している。



各学部棟の中央に位置する図書館には、各棟から直接にチェック無しで入館できる。ただし、出口は貸出カウンター前の一か所のみで、無届けの図書の持出しを電子的にチェックする装置が備えられている。したがって、図書を持出さない限りは、誰でも自由に図書館に出入し、館内閲覧できることになる。図書はすべて開架式で、明るい書庫兼閲覧室の雰囲気は、通常の大学図書館のイメージとは印象を異にする。子連れの学生が館内を歩いたりするのも、われわれには目新しかった。もちろん、館内には、カードまたはコイン式

のコピー機が10種機設置されている (ただし、日本より相当に旧式) から、誰でも手続無しでコピーもできる。開館時間は、日曜祝日を除く午後11時まで。

図書の管理は、すべて電算化されており、貸出は、磁気カード化された学生証による。検索用カードは存在せず、利用者は、館内に数10台設置されているコンピューターで図書を検索することになる。この機械によって書名中のキーワードまたは著者名等を手がかりに、図書番号、配架場所、貸出中か否か、貸出

期間等が一目で理解できる。貸出中の図書については、この機械に自己の学籍番号を打込むことによって、借出の予約をすることができる。図書が返却される (貸出期間は一か月) と貸出カウンターにキープされ、予約者宛に郵送で通知がある。教授等が無期限に借出した図書についても、同様の手続で中間借出を請求できる。

図書の多くが複数部ずつ用意されているにもかかわらず、前記の手続を利用しなければならないことが多かった。すなわち、図書を利用する学生が多いのである。本学でも、こうしたシステムが必要となる日が来るのであろうか。考えさせられた。(やまだ ひろし：行政法)

《在外研究を終えて》

古都コンスタンツの

総合大学図書館

西ドイツ

法学部助教授 山田 洋

私が西南の図書館に就職したのは、昭和29年9月で、ちょうど旧図書館の建築が完成する直前のことでした。旧図書館は、現在の大学院校舎の場所に、鉄筋3階建て、座席数210、図書収容可能10万冊の規模でできました。

現図書館と比べると、約5分の1程度の小じんまりしたものではありませんでしたが、緑の松林の向うに浮かぶ白い瀟洒な建物は、大変印象的で、私達はこれを白亜の館と呼んだのです。又その中身も、当時西日本では最初の試みとされた、ほとんど全面的な開架制度を採用し、しかも部門別に閲覧室を分ける方式をとったので、各地から見学者が相次いで訪れました。図書館職員の数も、大幅に増強され、司書講習会や図書館研修会などに派遣して資質の向上が図られました。職員が早速手掛けたのが図書の整理法の近代化で、日本十進分類法や日本目録規則への切替えがなされましたし、又利用者とのコミュニケーションに役立てようと、図書館報を刊行したのもこの頃からです。当時、図書館の職員は30歳前後の若者ばかりで、皆この新システムを成功させようと張り切っていたものです。ただ、戦後間もないころのことですから、職員のふところはとてもさびしく、「おどま館人館人あん人たちやよかし」などと口ずさんだことすらありました。

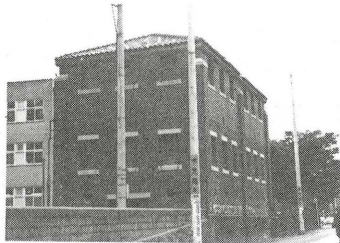
新しい図書館ができて、利用が飛躍的に増加したことは言うまでもありません。入館者数、貸出図書数とも前年度と比較して5割近くもふえたのでした。ところがこれには一部異説がありまして、当時図書館には類い稀な美女がズラリと採用され、カウンターに並んでいましたので、利

用の増加は正にそのせいだというのでした。

さて、当時の図書館は、大学、高校、中学を総合した学院図書館で、大学の学生のほか、高校生や中学生も利用できたのです。ある夕方の

ことでしたが、あまりに2階が騒がしいので注意をしようと駆け上ってみると、何と閲覧室で中学生が鬼ゴッコをしているのです。これにはいささか驚きました。やがて、大学図書館と高校、中学のそれとは別にすべきだとの意見が大勢を占め、昭和35年4月、大学図書館一本に組織変えがなされました。そのころ蔵書数は約5万冊で、専門図書の不足が指摘されていました。そこで図書予算の増額を要請するとともに、篤志家の図書寄贈を募ったりしました。本を寄付しようとの申し出を受けたら、早速リヤカーを引いて、その家まで出掛けました。職員は運搬屋も兼ねていたのです。昭和35年7月には、地域の図書館界の要望に応じて、司書・司書補・司書教諭の講習会を本学で開きました。九州全域及び広島、山口から約450人もの受講者があって、そのお世話に飛び回ったのも、今は懐かしい思い出です。かつて専門学校時代には、図書の貯蔵庫としか考えられていなかった図書館も、こうして次第に利用を第一義とする方向へ歩みを進めていったのでした。今や情報化社会の中で、図書館は、研究者や学生のニーズをどうキャッチするのが、そしてそれにどう対応するのが問われています。新しい時代

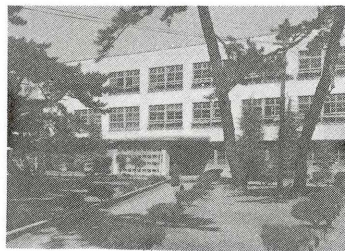
へ向けて、本学の図書館が益々発展していかれることを望んで止みません。



☆☆☆☆ 大学図書館発足

のころの思い出

山下和夫



(写真上：西南学院図書館。高校西門付近。)

(写真下：昭和30年頃の旧図書館。大学院付近。)

【やました かずお：大学図書館初代司書長、教務課長、教務部事務次長を経て、本年10月31日付退職】

《図書利用カード配布中》

図書館トータルシステムの一環として、皆さんの在学番号や氏名などに対応したバーコードラベルを貼付した図書利用カードを配布中です。貸出し手続が簡素化、迅速化され、貸出し返却状況も一目瞭然です。今後はこのカードがないと図書貸出しができませんのでまだ受取っていない人は早目に。

《帯出・返却手続時間の変更》

コンピューターの導入により、図書の帯出・返却時間が次のように変更になりました。

帯出手続……………午後7時50分まで

この時刻までに帯出手続した図書は、再度閲覧室に持ちこんでも、さしつかえありません。

返却手続……………午後9時まで

お 知 ら せ

①大学祭期間中

11月8日(木)
} 9:00~21:00 学習室以外開館
11日(土)

②冬季休暇中

12月25日(月) クリスマス休館
27日(水) 9:00~12:00 学習室以外開館
28日(木)
} 年末年始休館
1月5日(金)
6日(土) 9:00~21:00 学習室以外開館
8日(月) 平常通り開館

③冬季休暇中の長期貸出(①②以外は除く)

①学部学生、専攻科生 5冊以内
留学生別科学生 10冊以内

12月15日(金)~1月6日(土)

②大学院生 20冊以内
10月26日(木)~11月18日(土)

返却期限①②とも1月18日(木)

報 告

《図書館委員会》

1. 6. 14 ①図書館増改築計画の進捗状況
②学術情報センターとのネットワーク接続申請
1. 9. 7 ①図書館業務電算化の進捗状況
②図書館の増改築(経過報告)
③図書館利用規則改正案

《研修・出張》

- 私大図書館協会春季西地区部会 (1. 6. 23)
於：神戸学院大学 篠崎課長、坂口係長出席
○私大図書館協会総大会、研究会 (1. 8. 1~3)
於：近畿大学 堤次長、篠崎課長出席
○私大連盟業務別研修会(図書館) (1. 9. 4~7)
於：慶應義塾大学 立石司書出席
○私大等情報処理教育連絡協議会事務電算化研修会(1. 9. 18~20) 於：浜松 佐藤司書出席
○九州地区著作権講習会 (1. 9. 21~22)
於：福岡 古庄司書、吉村、川上司書補出席
《本学開催の研究会等》

- 第6回九州EC研究会 (1. 7. 1)
於：学術研究所 17名出席
研究報告

①丑山 優氏(九州大学)「ドイツ銀行の最近の動向—とくに合併戦略について」

②アリ M. エルアグラ氏(福岡大学)「The Costs of the CAP: A Critical Survey」

- 図書館実習
1. 6. 26~1. 7. 8 福岡女子短期大学 5名

《人事異動》

平成元年7月1日付

図書館長 長 洋一(文学部国際文化学科)

編 集 後 記

『青春には、あらゆる可能性が秘められている。』(国文学者：大町桂月)青春は短い。大学時代はもっと短い。寸暇を惜しんで書に親しみ、自分自身を見つめるときが必要だ。(J)